

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	言語コミュニケーション文化研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 学生の履修ニーズに対応した開講科目の見直しを行う。	→履修者数一覧。	B	B	B	A	A
2. マルチメディアを活用した授業形態を2013年度までに3割に拡大する。	→マルチメディア利用の科目数。	B	B	A	A	A
3. オムニバス方式の授業形態をさらに工夫する。	→オムニバス形式科目に関するFDワークショップの開催。	B	B	B	B	B
4. 学生による授業評価制度を活用し、授業内容、運営方法等の改善を進める。	→学習効果測定の指標の開発、実施。	B	B	B	B	B
5. 研究活動への学生の主体的参加を促すため、言語コミュニケーション文化学会の活動を強化する。	→学会での研究発表数。教員・学生の参加者数。学会の講演会、教員を主体とするシンポジウムの公開。	A	A	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 授業アンケート調査の結果を参考にし、2011年度末にはFDワークショップで学生と意見交換を行った。その後2011年度には言語教育領域のカリキュラムに関するWGを組織し、協議の結果、小学校英語教育関連科目を二つ設置した。2012年度には、言語文化領域に関するWGを組織し、協議の結果、2014年度より、分かりやすい科目名称への変更、科目の廃止と新設(異なる語種の横断的科目)とが実施された。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か カリキュラム改革によって学生のニーズにより対応した科目は準備できた。今後も授業アンケートを参考にして、学生のニーズに対応した科目をさらに設置する必要がある。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か カリキュラム改革によって新設された科目について学外にさらに宣伝するとともに、入試相談会、授業アンケートを参考にして、学生のニーズをさらに把握し、新設できる科目を模索する。</p> <p>その他</p>	☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか マルチメディア機器利用に関して研究科委員会で積極的な利用を促したため、担当教員の大部分からマルチメディア機器利用の申請があり、2013年度には開講授業の86.5%まで達した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か マルチメディア機器は積極的に利用されている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学生のニーズに即して、マルチメディア機器の利用の仕方をさらに検討する。</p> <p>その他</p>	☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2011年度に開催されたFDワークショップでオムニバス形式の授業について学生の意見を聴取した。それをうけ、2012年度には言語教育領域、2013年度には言語文化領域にWGが設置され、オムニバス形式の科目を含む全科目について見直しを検討された。科目(例、言語教育学特殊講義)によっては、最後の授業ですべての担当者と受講生が集まり、授業内容について学生の要望を聞くなどの総括を実施している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 幅広い知見が得られたという学生の感想が多く、オムニバス形式の科目の目標のひとつが達成されている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 授業アンケートをもとに、オムニバス形式の授業内容を毎年検討し、他の科目との連携を模索する。</p> <p>その他</p>	☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 全科目において学期末に授業評価を実施している。授業評価の回答は、教員による学生の評価に影響がでないように、成績の提出が終わった後に各教員に渡される。また回答は研究科執行部もチェックを行っている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 記述式の授業評価であるため、授業の長所・短所が担当者に伝わりやすく、授業改善に役立っている。少人数の研究演習でも授業評価を導入しているが、サンプル数が少ないため十分なデータが得にくい。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 研究演習については授業評価のほかに、教員間の情報交換により指導方法を共有し、各教員の指導力を高めていく。</p> <p>その他</p>	☆

目標5	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究活動への学生の主体的参加を促すため、言語コミュニケーション文化学会主催による学生の発表を中心としたフォーラムが年2回開催されている。また同学会では毎年紀要を発行しており、投稿してきた学生の論文を査読審査を経て掲載している。そのほか、外部の学会での研究発表を促進するため、言語コミュニケーション文化学会交通費補助制度が設けられている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学会では教員主体のシンポジウムを毎年公開で開催するとともに、学生による研究発表が毎年二回行われている。また紀要には年平均9.4本の論文が掲載されている。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 修士論文提出後に開催される第2回フォーラムでは多くの学生が研究発表を行うが、それに比べると第1回フォーラムでの研究発表が少ない。修士論文準備中の段階でも問題点を把握する好機になるとして、発表を促す。	☆
		その他	☆
備考			☆